

縄文時代早期末の環境と文化 Environment and culture in the end of incipient stage of the Jomon Period

西田 巖¹
Iwao Nishida¹

¹佐賀市教育委員会
¹Saga City the board of education

Abstract

The Higashimyo archeological site, located at Kinryu town, Saga city, Saga prefecture, was established for about a half millennium at the time of sea-level transgression in the end of incipient stage of the Jomon Period, and shell middens associated with the site were abandoned because of sea level rise. The site is composed of residential areas, tombs, shell middens, food-storage facilities, etc. in wetlands, and a set of these archeological remains belonging to the oldest stage of Jomon period are indispensable to reconstruct life style and culture of living people there. A period of residence was only 500-600 years at around 8000 cal yr BP, as revealed by AMS ¹⁴C dating. During the period, a large-scale environmental change has affected people lived there, as estimated by archeological remains excavated. The archeological survey and analysis of excavated materials at the Higashimyo site suggests clear and firm views of the environmental change and people's life styles at the end of incipient stage of the Jomon Period in Japan.

Keywords: 東名遺跡; 縄文時代早期末; 環境変動; 縄文文化

1 はじめに

東名遺跡は佐賀県佐賀市きんりゅう金立町に所在する(図1・2)縄文時代早期の遺跡である。国土交通省による洪水対策用の巨勢川調整池建設に伴い、1993年以降、佐賀市教育委員会によって2度にわたる発掘調査が行われた。調査の結果、今から約8000年前の居住地、墓地、貝塚、貯蔵施設がセットで確認された。特に、縄文海進の影響により5mの粘土層でパックされた湿地性貝塚からは、700点以上の編みかごをはじめ、縄文人たちの知恵や技術力の高さが窺える国内最古級の遺物が大量に発見され、一躍脚光を浴びた。遺跡の整理調査は現在も継続中であるが、以下に、これまでの調査・分析によりみえてきた縄文時代早期末の環境変動を含めた遺跡の変遷と、早期段階に存在した高度な縄文文化の概要について紹介する。

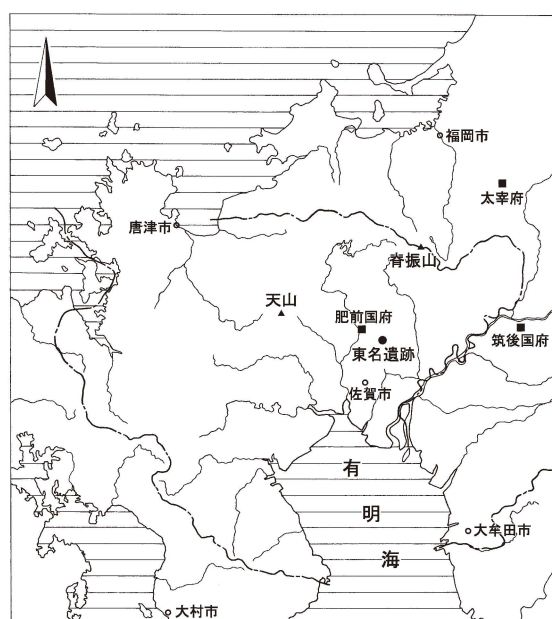


図1 東名遺跡位置図

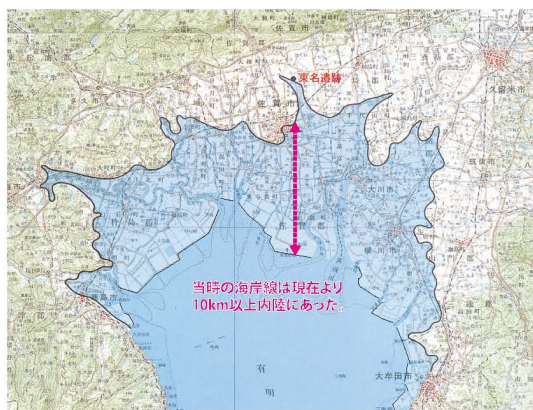


図2 縄文海進ピーク時期の筑紫平野

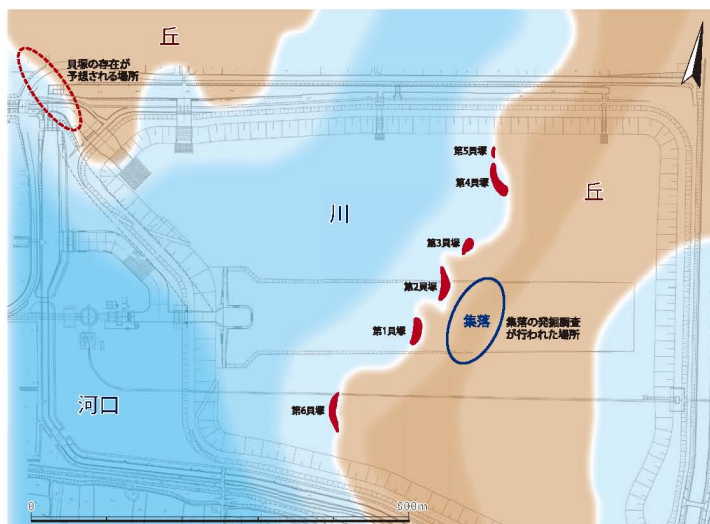


図3 東名遺跡の位置と旧地形

2 遺跡の立地と特徴

現在、東名遺跡は佐賀平野北部の沖積地に埋没するが、様々な調査の結果、遺跡が営まれていた当時は、脊振山から延びる丘陵の末端近くの海岸線が最も内陸に入り込んだ河口付近に立地していたことがわかった(図3)。東名縄文人たちは丘の上(標高+3m前後)に住み、167カ所の集石炉と墓地、それと大量の土器や石器を残した。貝塚は6カ所確認され、そのうち発掘調査を行った第1・2貝塚には、貯蔵穴が155基も残されていた(図4)。貝塚は川縁の傾斜面(標高-3~-1m)に形成され、貯蔵穴も水が得られる川縁につくられた。このような湿地帯には、植物性の遺物が水漬かりの状態で良好に残された。また貝塚にはカルシウムを含んだ貝殻がたくさんあるため、獣骨など動物性の遺物が良好に残された。加えて海面上昇(縄文海進)で厚く堆積した粘土層によるパッキング。東名遺跡では、この3つの条件が奇跡的に揃ったため、通常の遺跡では残らないようなものが良好に残存し、当時の生活様式や文化をより鮮明に、より具体的に知ることができる。しかも遺物の多くが国内最古級のもので、日本文化の起源を探る上でも重要な遺跡である。

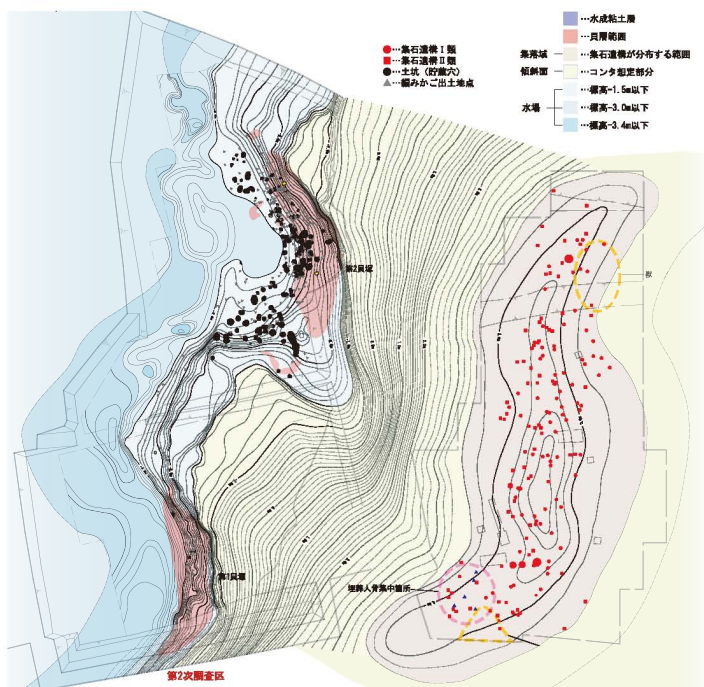


図4 居住域と貝塚周辺の地形想定復元図

3 遺跡の変遷

東名遺跡は、縄文時代早期末の比較的短期間(500~600年間)に営まれた遺跡で、豊富な炭素年代測定データを基に時間的な変遷が明らかになりつつある(図5)。まず、約8200年前の寒冷期(8.2K)から温暖化する中で遺跡の形成が始まる(7950 cal BP前後)。時を同じく全国的に本格的な貝塚形成が始まるようである。植生の中心は落葉広葉樹林→照葉樹林へ、

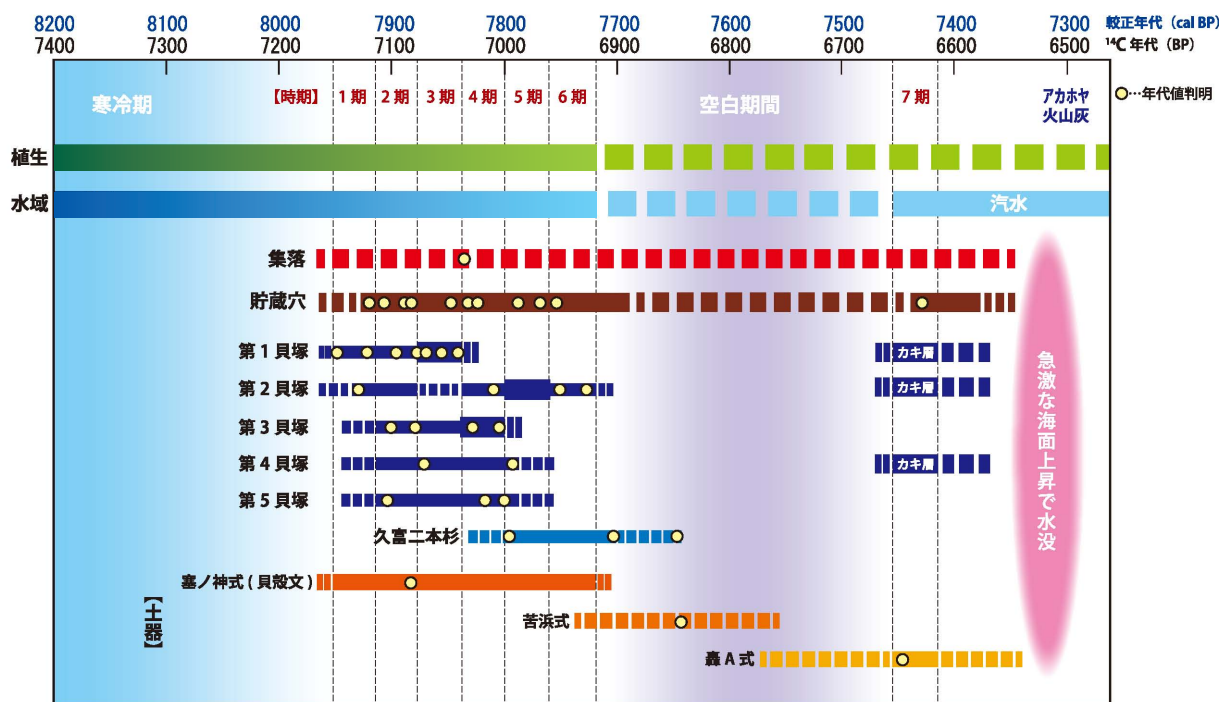


図5 東名遺跡変遷図 ※分析の途中段階で、今後修正する可能性がある。

周辺水域は海面の上昇により淡水域→汽水域へと変化していった。貝塚の形成はおよそ200～250年間続き、250～300年間の断絶もしくは縮小(空白期間)を経て、再び大型カキを中心とした貝層が短期間形成される(図6)。その後、アカホヤ火山灰降灰(7300 cal BP)までには、急激な海面上昇により遺跡全体が水没してしまう。この空白期間については現在検討中であるが、再び寒冷期が訪れた可能性がある。土器型式については、8.2K段階では塞ノ神A式土器→塞ノ神B式土器へ、上記空白期間では塞ノ神B式土器→轟A式土器への変化が認められる。これより、寒冷期が少なからず縄文人の生活や文化の生成に影響を及ぼしていたことが考えられる。



図6 カキ層掘削状況

4 生業

(1) 貝類と貝層の形成

貝塚に投棄された貝類はヤマトシジミ・ハイガイ・アゲマキ・カキが主体で、中でもヤマトシジミの割合が最も高い。貝層は、微高地からの投棄行為により傾斜面に沿って堆積するが、低地側では、海面の上昇に伴う粘土層が間層となり、互層をなすように堆積している(図7・8)。この堆積状況は、細かな海進・海退の痕跡である可能性があり、今後検討する必要がある。これまでの貝類の整理・調査分析の結果、第1～3貝塚では当初、ハイガイ・アゲマキの割合が比較的高いが、次第にヤマトシジミの割合が高くなることが明らかとなり、さらに投棄の中心も、第1→第3→第2貝塚と場所を移すことがわかってきた。第4・5貝塚では、上記4種の貝類が主体であることは同じだが、第1～3貝塚とはその組成に違いが見られることや位置関係などから、東名遺跡の貝塚群は少なくとも2つ以上の集団で形成された可能性が出



図7 第2貝塚貝層全景



図8 第2貝塚貝層堆積状況

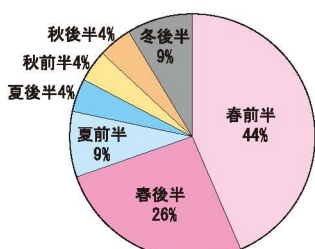


図9 ハイガイ採集季節

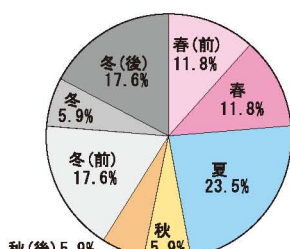


図12 シカ・イノシシ死亡季節



図10 貝塚出土動物骨(ニホンジカ・イノシシ・イヌ)

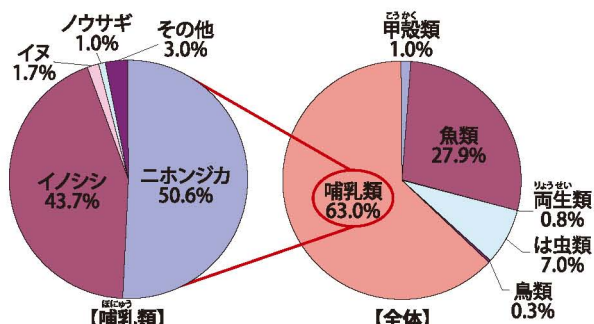


図11 貝塚出土動物骨の割合

てきた。そして空白期間を経て、大型カキの投棄は第1・2・4・6貝塚で確認することができる。また貝類の採集季節については、ハイガイの成長分析の結果、春～夏が中心で一部秋以降も行われていることがわかった(図9)。

(2) 動物遺存体と狩猟・漁労

貝塚から得られた動物遺存体は(図10)、哺乳類が最も多く、魚類が次いでいる(図11)。哺乳類の中ではニホンジカ・イノシシが圧倒的に多く、重要な食糧源であったことがわかる。両者の第1後臼歯で死亡季節を査定した結果、冬を中心に1年中狩猟活動を行っていることがわかった(図12)。また哺乳類ではニホンジカ・イノシシに次いでイヌが多く出土しているが、狩猟の伴侶として飼育されていたものと考えられる。魚類ではスズキが最多でボラ・クロダイが次ぐが、小型魚は少なく、さらに最近の耳石の調査で体長1m以上のホンニベが数多く認められ、その上、漁網錘や釣針などの漁労具が見られないことから、専ら刺突漁などによって大型魚を獲得していたようである。またスッポンも比較的多く、縄文時代早期から食用にされていたことがわかった。

この他、現在の日本近海では絶滅したアシカをはじめ、脊振山地には現存しないカモシカやツキノワグマの骨も出土しており、現在とは動物の生息域が異なっていたことが推測される。

(3) 堅果類と貯蔵穴

貯蔵穴は全体で155基確認し、平面円形で直径80～120cm、深さ40～70cm程度のものが



図 13 貯蔵穴 (編みかご出土状況)



図 15 大型貯蔵穴

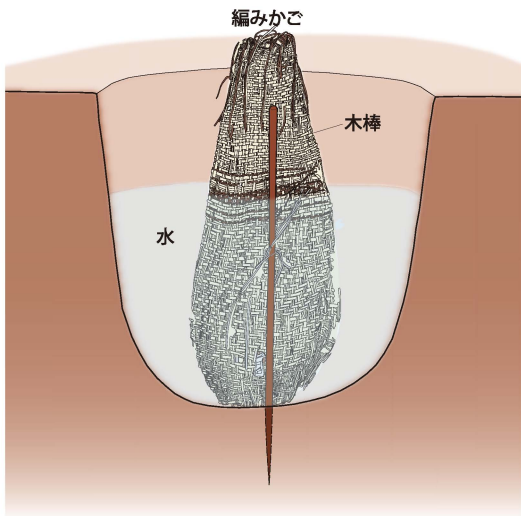


図 14 貯蔵穴復元図

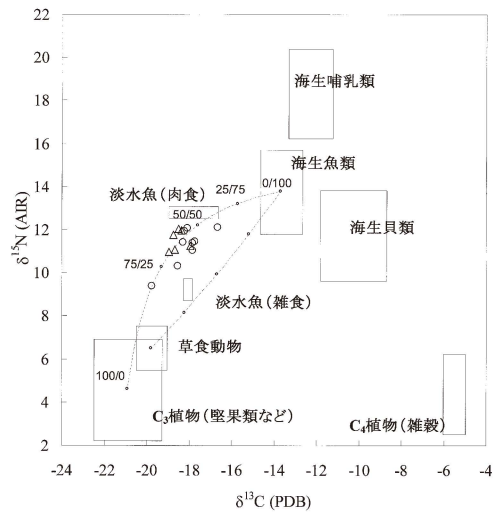


図 16 人骨における炭素・窒素同位体比 (○女性, △男性)

多い (図 13)。貯蔵された堅果類には、イチイガシ・クヌギ・ナラガシワがあるが、イチイガシが最も目立つ。これら堅果類は、高さ 80cm 以上の大型編みかごに入れられた状態で水漬けにされたものと考えられる (図 14)。貯蔵穴の変遷については、淡水域の段階では湧水を利用した形で貯蔵穴が構築され、海面上昇により汽水域になると、潮汐作用による増水を利用した長軸が 2m を超えるような大型貯蔵穴が出現する (図 15)。その後、海退のためか小型化の傾向にあり、その数も次第に減少するようである。また貯蔵穴内には、堅果類以外の素材束や木製容器類の未製品などが入れられており、水漬けの施設として多目的に利用されていたことが推測される。この他、打撃痕の残るオニグルミ核が貝層から比較的多く出土しており、オニグルミも重要な食糧源の一つであったようである。

貝塚から出土した散乱人骨 18 点の炭素・窒素同位体分析の結果、陸上の植物が主要な食糧源で、合わせて海生魚類をタンパク質源とする食生活が営まれていたと推察される (図 16)。これより、植物食が東名縄文人の食生活において大きなウェイトを占めており、短期間にしか収穫できない堅果類を貯えることは、重要な生業の一つであったに違いない。

5 ものづくり

(1) 動物性遺物

東名縄文人は貝殻で貝輪 (ブレスレット) や貝玉など、たくさんのアクセサリーをつくった (図 17)。その素材となる貝は、ほとんどが食べたものではなく、深場もしくは遠隔地に生



図 17 貝製アクセサリー



図 18 骨角製アクセサリー

息する貝種で、死んで海岸に打ち上がった殻を使用していた。貝輪の素材のうち、最も多いクマサルボウは有明海に生息するが、ベンケイガイ・マツバガイなどは外海に生息するため、唐津・糸島方面からもたらされたものと考えられる。特にオオツタノハは鹿児島以南の南西諸島から持ち込まれたものと考えられ、遠隔地の貝が手に入るような交易が行われていた可能性がある。貝玉の素材には、ツノガイ・小型巻貝・二枚貝（ビーズ）やタカラガイ・イモガイ・クチベニガイ（ペンダント）などがあるが、そのほとんどが外海に生息するものばかりである。これから、現代のような輸送手段を持たない縄文人たちの行動範囲が想像以上に広く、特定な貝に対するこだわりも非常に強かったということがわかる。

また動物の骨や角は、刺突具をはじめとした加工具や、たくさんのアクセサリーに加工した。中でもアクセサリーが多く、イノシシ牙のペンダントや魚椎骨のピアスやネックレス、鹿角のヘアピンなどがある（図 18）。特に列点文を施した鹿角のアクセサリーは、造形的に優れ、縄文人の高い技術と豊かな感性が窺える。イノシシやニホンジカは食糧としてだけではなく、これら骨角製品の素材としても重要で、中でも鹿角は、落角が比較的容易に獲得できるため多用された。

(2) 植物性遺物

湿地を中心に多くの木製品・編組製品・繊維製品等が出土した。中でも編組製品は 740 点を数え、そのほとんどが袋状の編みかごもしくはその破片であった。編みかごは高さ約 70cm

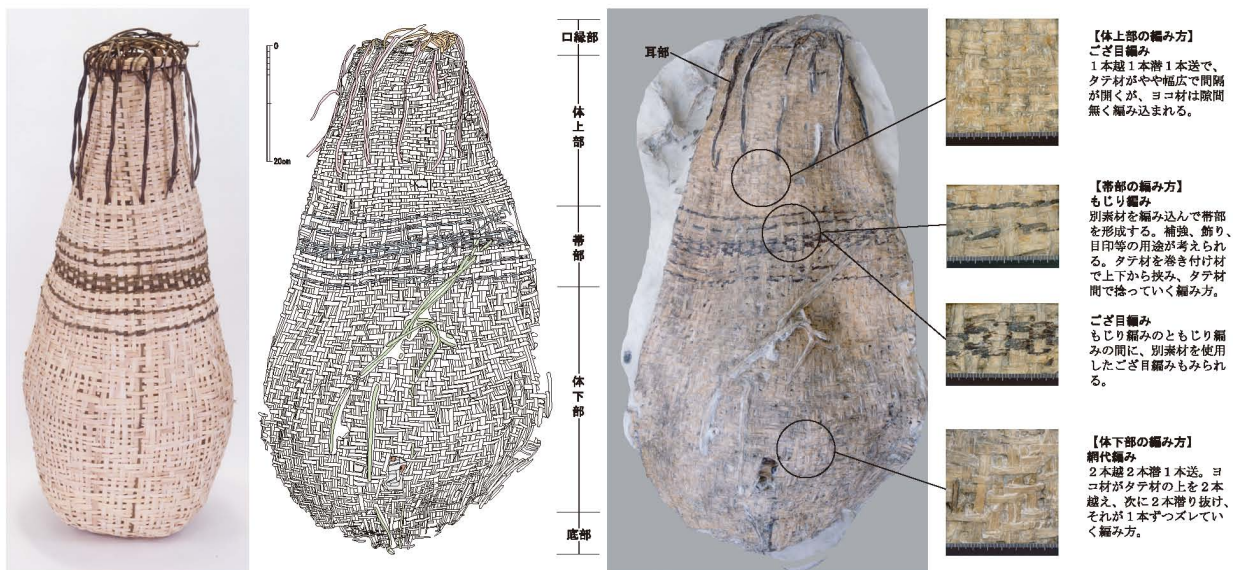


図 19 大型編みかご (SK2160 編物②, 左端復元品)

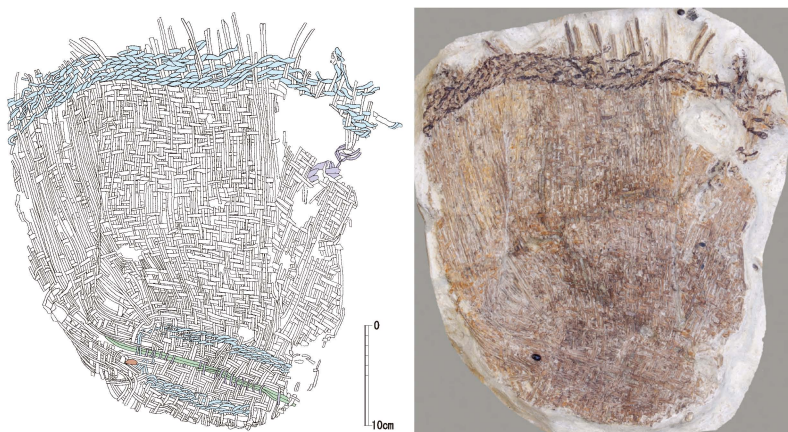


図 20 小型編みかご (AM2180)

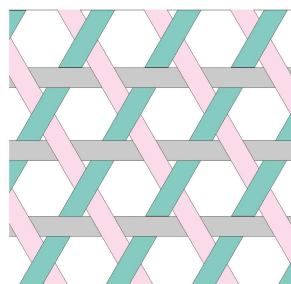


図 21 六つ目編みのかご (AM2080)



図 22 様々な木製品

以上の大型と約 50cm 以下の小型に大別され、前者は主に堅果類の貯蔵用、後者は運搬具として使用されていたと考えられる。大型のかごは、ムクロジやイヌビワの直径が 10cm を超えるような丸太をミカン割りにし、削いで作った幅 5 ~ 20mm のテープ状のヘギ材を網代やござ目で編み上げている (図 19)。小型のかごは、割り裂き材のほかにはツヅラフジやテイカカヅラ属等のツル性植物を使用するものも多く、網代やもじりで編み上げる (図 20)。中にはヘギ材を使用した六つ目編みのかごも見られる (図 21)。編組技法については、国内の縄文遺跡で確認された技法のほとんどが認められ、それらがすでに早期段階に存在していたことがわかった。繊維製品類としては、ツヅラフジやワラビを使用した様々な形態の縄類や把手等が出土している。その他、編組製品や繊維製品類の素材であるツヅラフジやワラビ等を束ねて水漬けにした素材束も、貯蔵穴を中心に出土している。

木製品には容器類をはじめ、搦い具・堅櫛・堀り棒・櫛状製品・弓状製品・板状製品・尖棒 (木杭) 等がある (図 22)。容器類は未製品がほとんどで、その多くは貯蔵穴内に水漬けにされていた。整形が比較的容易な木の瘤を多用し、加工を容易にするため水漬けや焦がしを入れながら、中を削り抜いて、容器を製作したと考えられる。堅櫛は 2 点出土しているがいずれも欠損品で、漆の使用は認められなかった。櫛状製品は扁平部の幅が狭く断面が三角形に近いものが多いため、干潟を突いて進むような機能を有していたのかも知れない。

このように東名遺跡から出土した製品素材・未製品・製品は、未発達な技術力を補うため、素材の選択に加え、水漬けや焦がし等を多用し加工を容易にするといった工夫がみられ、初現的な素材利用と加工技術を知る上で貴重な資料である。

6 むすび

以上のように、これまでの調査・分析により東名遺跡の特徴や変遷が明らかになってきた。

遺跡の形成には、環境変動が大きく影響していることは明らかであり、今後、遺跡に残された環境変動の痕跡を読み取り、より詳細な遺跡変遷について明らかにする必要がある。また東名遺跡から出土した国内最古級の遺物群は、これまでの縄文時代早期に対するイメージを一新する発見であり、高度な縄文文化が早期段階に存在した証でもある。今後、個々の遺物の評価をとおして、縄文文化における早期末段階の位置付けを行い、さらに、環境変動とともに国内の縄文時代早期末の実像について明らかにしていきたい。

謝 辞

東名遺跡の調査・分析に関しては、様々な専門分野の研究者の方々にお世話になりました。ここでは紙数の関係上、各個人名については省略させていただきますが、特に遺跡の変遷に関しては炭素年代測定を軸としており、100点以上の測定をお願いした名古屋大学年代測定総合研究センター長の中村俊夫教授には大変お世話になりました。記して感謝申し上げます。

引用文献

- 佐賀市教育委員会 2004『東名遺跡群Ⅰ 東名遺跡1区－縄文早期遺跡の調査－』第1・2分冊
佐賀市文化財調査報告書第150集
- 佐賀市教育委員会 2009『東名遺跡群Ⅰ 東名遺跡1区－縄文早期遺跡の調査－』第3・4分冊
佐賀市文化財調査報告書第150集
- 佐賀市教育委員会 2009『東名遺跡群Ⅱ－東名遺跡2次・久富二本杉遺跡－』第1～7分冊
佐賀市埋蔵文化財調査報告書第40集
- 柴畑光博 2002「考古資料からみた鬼界アカホヤ噴火の時期と影響」『第四紀研究』41(4)
pp.317-330
- 柴畑光博 2013「鬼界アカホヤテフラ(K-Ah)の年代と九州縄文土器編年との対応関係」
『第四紀研究』52(4) pp.111-125

要 旨

佐賀市^{ひがしきょう}東名遺跡は縄文時代早期末の遺跡で、国内最古の湿地性貝塚である。また居住地・墓地・貝塚・貯蔵施設がセットで確認され、当該期の生活様式や文化を知る上で希少な資料であると同時に、日本の縄文文化を研究する上で欠くことのできない遺跡である。東名遺跡の整理調査は発掘調査以来継続中で、近年の自然科学分析、特に炭素年代測定により、自然環境を含めた遺跡の変遷が明らかになりつつある。遺跡の存続期間は500～600年間と比較的短い、その変遷には環境変動が大きく影響し、その痕跡を遺跡から読み取ることができ、さらに、高度な縄文文化が早期段階に存在してことを裏付ける数多くの資料が出土している。東名遺跡の調査・分析により、遺跡形成を取り巻く環境変動や遺跡の変遷とともに、縄文時代早期末の実像が明らかになりつつある。